

第15回

『太平記』が語る越中放生津の合戦



越中名越一族の妻女が入水したとされる新湊の海の風景（富山県射水市新湊地区）

後醍醐天皇の即位から足利義満の将軍就任までの南北朝内乱を描いた『太平記』は、南北朝期のほぼ唯一の軍記物で、史実の誤謬や実在の定かでない人物の活動など、内容の批判的検討は必要とされるが、社会や思想の動きについて、時代の本質を伝える部分も少なくなく、史料としても重要な歴史書である。

この『太平記』のなかに、鎌倉末期から南北朝初期の越中国の放生津（現射水市新湊地区）をめぐる合戦の歴史が語られており、哀れを誘うものがある。その合戦譚には、当時の確かな史料を欠くため、定かでない部分もあるが、鎌倉幕府の滅亡とその再興を企てた越中守護をめぐる動きは、当時の状況から史実の可能性が高く、その内容が『太平記』で語られたものと思われる。

朝廷（後醍醐天皇）と鎌倉幕府（北条氏）の対立構図

鎌倉幕府 討幕	朝廷（宮方・後醍醐天皇）		鎌倉幕府 北条時（執権）
	足利尊氏・足利直義 新田義貞・楠木正成・護良親王	朝廷（宮方）	
越中放生津 合戦		出羽・越後勢 越中・能登勢	越中放生津城 名越時有（越中守護） 名越有公・貞持 (越中・能登勢)
足利尊氏と 護良親王の 対立	足利尊氏	護良親王 (征夷大將軍)	
中先代の乱	朝廷（宮方） 足利直義 足利尊氏		叛乱軍 北条時行（高時次男）
西園寺公宗の 謀反（計画）	朝廷（宮方） 西園寺公重	叛乱軍 西園寺公宗 名越時兼（時有子） 北条泰家（時興/高時弟）	
加賀 大聖寺合戦	朝廷（宮方） 高間行秀 南加賀・越前勢 〔福田・敷地・上木・山岸氏（狩野党） 瓜生・深町・武曾氏（越前）〕		叛乱軍 名越時兼（時有子） 越中・能登・加賀勢 〔野尻・井口・長沢氏 倉満（光）氏〕

赤字は本稿に登場する主要人物

守護名越時有の滅亡

『太平記』卷十一によれば、鎌倉末期の越中守護であった幕府執権北条氏一門の名越（北条）時有は、弟の有公、甥の貞持と共に、討幕を企てる後醍醐天皇（宮方）に呼応し北陸道経由で上洛を目指し進撃する出羽・越後の軍勢を、越中で阻止すべく、射水郡の二塚（現高岡市二塚付近）に陣を布き、近国の軍勢を集めたとされる。

しかしその直後に、鎌倉幕府の京都における出先機関であった六波羅探題が、宮方の足利尊氏に攻められ陥落し、東国でも宮方の新田義貞が蜂起し、やがて鎌倉に迫るとの情報が伝わった。このため時有の催促

に応じて二塚に参陣した能登・越中の武士たちは、状況の変化に乘じて宮方に転じ、幕府方の時有に離反して、守護所の在った放生津に退いた時有らを攻撃する動きを示した。その結果、時有の許に残留した手勢は、守護名越氏の一族・譜代など僅か侍79人のみであった。

元弘3年（1333）5月17日の正午、出羽・越後の宮方の軍勢10000余騎が、放生津の守護所に来襲すると聞き、守護時有は、小勢での防戦をあきらめて死を決意した。そこで敵勢が近づく前に、21年連れ添った時有の妻と子弟の九歳・七歳の兄

弟をはじめ、若き有公・貞持の妻女らを、舟で海上遙かに漕ぎ出させ、越中奈吳浦（放生津の海岸）の沖で投身入水させることとした。その後放生津の城（守護館）に残留した時有ら79人は、妻子らが遙か海中に沈む姿を見届け、共に自刃し、兵火のなかで焼死して果てたのであった。

やがていつの頃からか、越後の舟人たちが奈吳浦を通過するとき、海上で女の悲泣の声を聞き、汀^ひ※1の方からは男の声が船を呼び止めるなど、時有一族とその妻子の亡靈の怪異が現れ、人々を驚かせたと『太平記』は伝えている。

名越時兼の挙兵

元弘3年5月、新田義貞の鎌倉攻略によって、執権北条高時以下が自刃して鎌倉幕府が滅亡し、翌6月、後醍醐天皇が入京して、公家一統の政治「建武の新政」に着手すると、越中国では中院定清（後醍醐天皇の近臣中院定平の子息）が国守^{なかのいんさだきよ}※2となり、守護^{さみ}※2には普門利清（井上俊清）が補任された。

しかし護良親王^{もりよし}※3と足利尊氏の対立による内訌の激化や新政の混乱のなかで、鎌倉期以来、幕府・朝廷交渉の窓口の職を担う関東申次として勢威のあった、公家の西園寺家嫡流の公宗による新政転覆の陰謀が発覚し、捕縛^{はくばく}される政変が起こった。

建武2年（1335）7月、先に公宗に呼応して叛乱^{はんらん}※1を企てていた、前幕府執権北条高時の遺子で次男の時行が、北条氏の再興をはかつて信濃国で挙兵し、武藏



越中放生津城址（現射水市立新湊放生津小学校）

※1 海・湖などで水と陸地とが接している所。みずぎわ。

※2 この時代の国守は朝廷から派遣された国司（地方管理者）の長官、守護は武家職で警察・軍事面の指揮官。

※3 後醍醐天皇皇子。元弘の乱で鎌倉幕府打倒の功績をあげ、建武の新政で征夷大将軍となるも、足利尊氏との対立により將軍職を解任され失脚。中先代の乱の際、足利直義の命により殺害される。

※4 かねてからのこころざし。

※5 太平記の校訂・注釈書。元禄2年（1689）成立、元禄4年（1691）刊。徳川光圀の命により、大日本史編纂の資料として作成された。

※6 中世、自分の軍功を大将や軍奉行に提出して、後日の論功行賞の証拠や家門の名誉とした文書。

国に進んで足利直義（尊氏の弟）を破り鎌倉を占領する（中先代の乱）。この叛乱は、やがて京都から下った足利尊氏によって制圧されたが、そのとき北陸においても、これに連動した動きがみられた。

『太平記』卷十三によれば、西園寺公宗の謀叛計画にあたり、公宗は幕府滅亡の際に、鎌倉から落ち延びていた高時の弟泰家を還俗させて時興と名乗らせて置っており、この時興を京都の大将として畿内近国から軍勢を集め一方、時興の甥の北条時行を関東の大将として、甲斐・信濃・武藏・相模の軍勢を率いさせ、一族の名越時兼（前越中守護時有の遺児）を北国の大将として、越中・能登・加賀の軍勢を集めることを企てていたとある。

だが公宗の計画が、弟公重の密告によって露頭したため、京都で叛乱を画策していた公宗の一党は東国や北国に遁れ、素懐^{すくわい}※4を達せんことを謀ったとされる。このため時兼の許には、越中の野尻・井口・長沢氏や加賀の倉満（光）氏らが馳参じ、越中・能登・加賀の軍勢は6000余騎に及んだ。そこで時兼は北陸道を打ち順え、30000余騎をもって京都に攻め上ろうとした。もとよりこの時兼軍の兵数は、そのまま信頼できないが、かなりの数に上っていたことは疑いない。

加賀大聖寺合戦と時兼の討死

上洛を目指す名越時兼軍は、越前との国境にあたる加賀国江沼郡の大聖寺（現加賀市大聖寺町）で、後醍醐天皇方の敷地・上木・山岸・瓜生・深町氏など、南加賀・越前の僅かな軍勢に阻まれ、合戦の末、名越軍は壊滅的打撃をうけ、時兼は当地で戦死した。

『参考太平記』※5の注によれば、名越勢を撃破した福田・敷地・山岸・上木の諸氏は、隣接する福田荘の地頭狩野氏の一党で、当初名越方に攻められ、大聖寺城に楯籠ったが、やがて越前から武曾・深町・瓜生の諸氏が救援に赴き、後方から名越軍を攻めると、籠城していた狩野党も城外に撃って出て、名越軍を挟撃し、大聖寺川に追い詰め、壊滅させたとある。またこのとき宮方の大和國の高間行秀が、時兼軍討伐のため北国に赴いており、その軍忠状^{たかまゆきひで}※6から、大聖寺合戦の時期は、同年（建武2年）8月であったことがわかる。